



主從心得草
上

9
4098

77





秩父の衣司
重忠民裁判明白の番

おはな

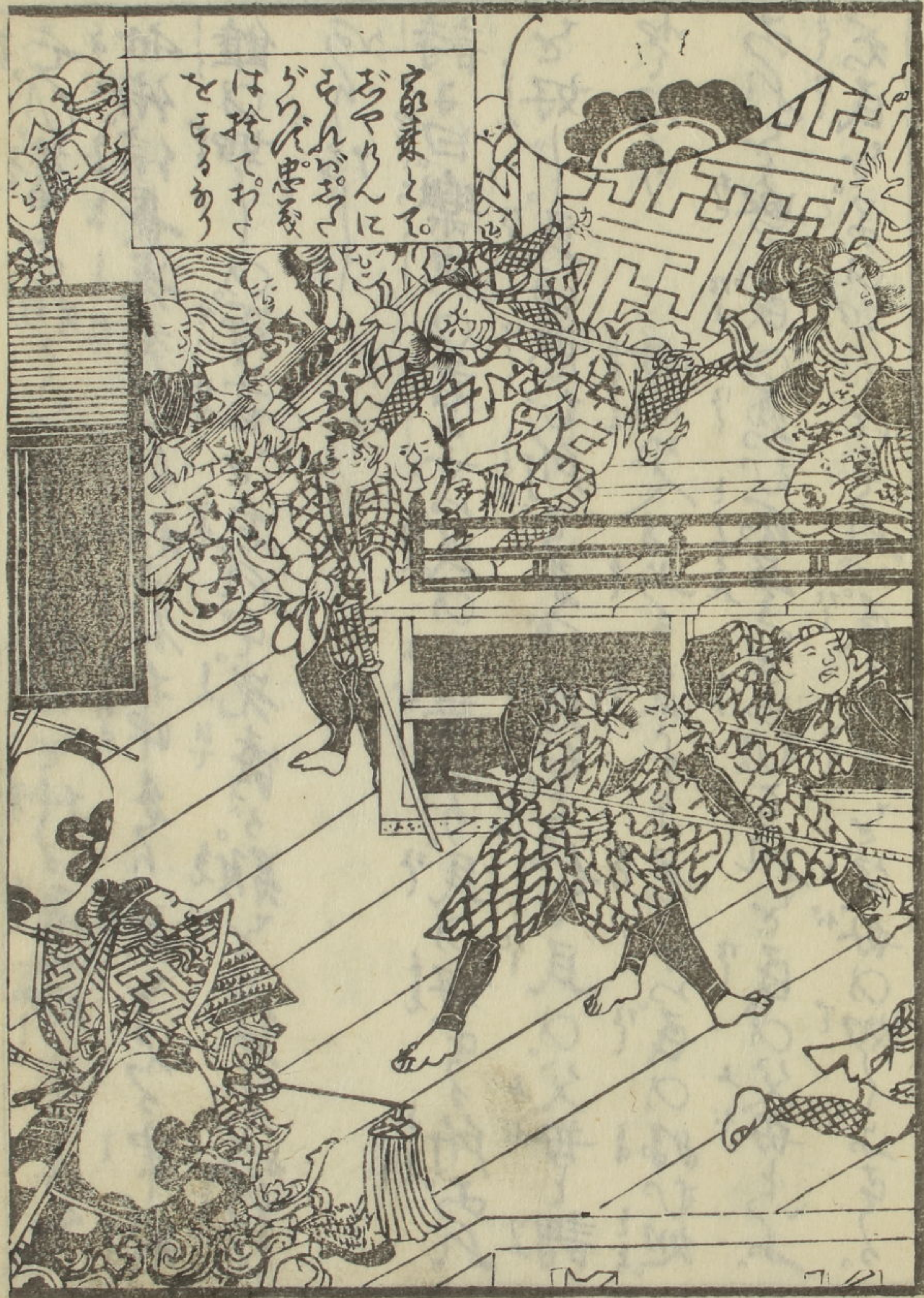
終日おんあつあつとつた僻坐也ぞんば莊子は白鴉の
 腰短しつゝもの是とつぐと憂あへ霧の腰長しや
 つゝも是と截を懸てあへ腰の長も切なうらぐ腰
 おも續なるつたつて月身を自身おはつて終日
 にうらぐ或や他身を他身まつる如く如何なる心
 とつて奴中とつてつてはつてあつてあつて
 お身だふ我終あへ娘身の中に
 人の世つゝつゝあつてあつて
 人の世つゝつゝあつてあつて

何ぞん。されば己ふは。其の。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
人をおぼらる。樂あり。其の。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。

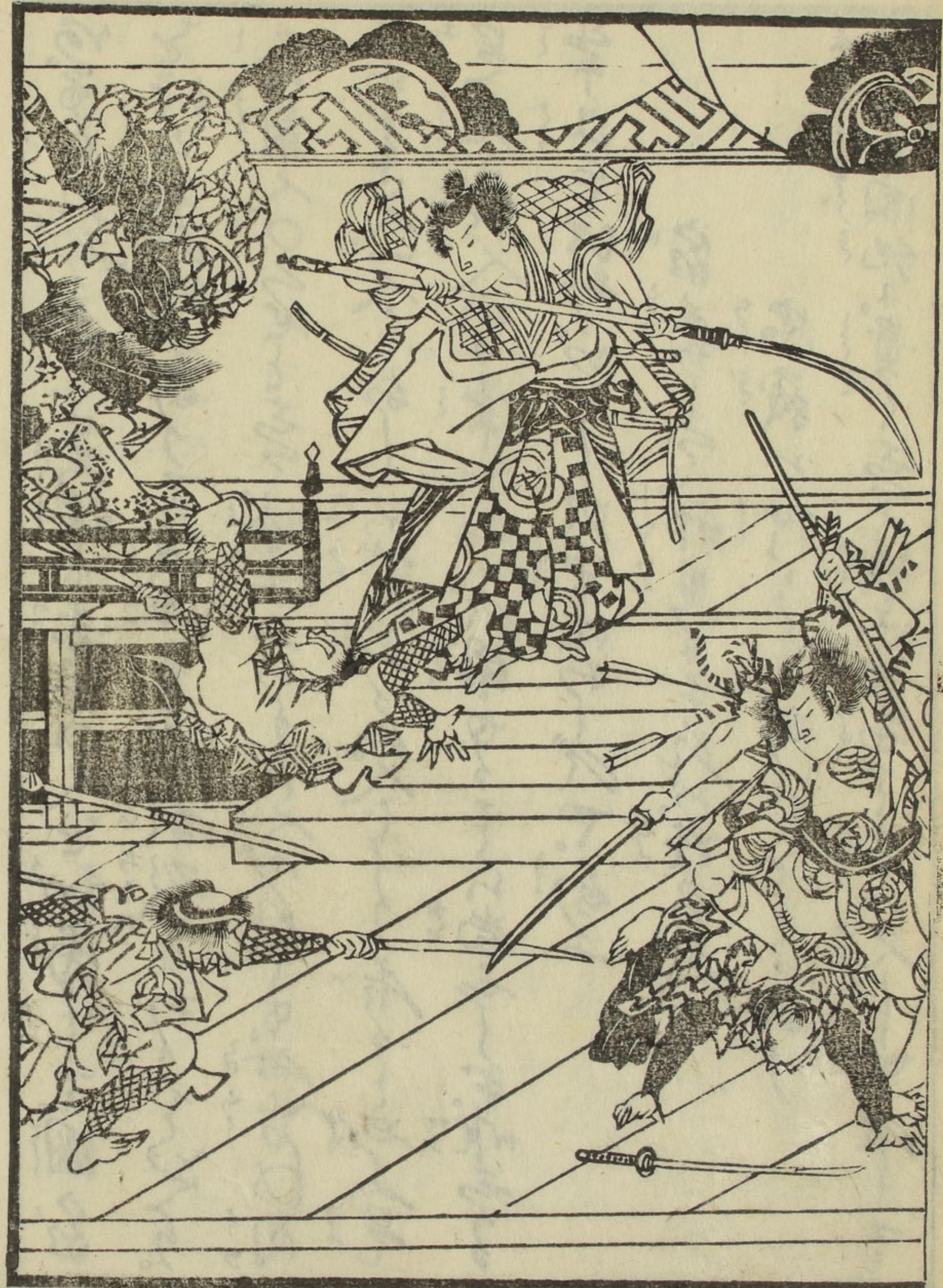
人の。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。

何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
何ぞん。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。

論語。孔子の曰。君子の事。易。説ぐ。難。之。
を説ぐ。其の。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。
及んで。之を。器。小人の事。難。説ぐ。易。之。
を説ぐ。其の。昔樂順。遂は。昔也。抑。何ぞん。



主君の御下



その舊を物とて新切を捨る者ありしとや
新信長光秀の如く然中をり。君をん半。冠
雖の如く。の言を忘れど。光秀が。類とあせぐ。好ひ
有りた

詩曰。樂只の君子。民の父母あり。民の好む所あり
を好む。民の悪む所。を惡む。これを民の父母と謂
や有り。然る人のよき。も。君子の民の好む如
あれを興く。民の惡む。是を止む。これを民の父母と
君民を子の如く。にせられ。民も君を父母の如く。よむ。

あふあれが。國家の泰平とや

小條九代記。兵書より。寛仁大慶の。唐く。氣を覺え
天下の。人。の。を。に。背。く。と。て。天下と。お。保。つ。ま。あ
あ。う。で。ら。安。泰。お。わ。り。一旦。格。別。に。思。は。れ。て。後。を。つ。く。た
何。ぞ。の。礼。を。口。から。考。へ。の。う。み。一。時。お。こ。り。急。ぐ。お
背。く。半。是。人。界。の。常。あり。平生。俱。あ。に。愛。の。人。の。必。く
わ。し。の。物。も。此。財。も。お。同。く。相。う。ら。げ。お。親。む。是。今。く
人情。平。に。ゆ。ぐ。世。方。の。仕。方。ま。う。り。て。代。人。の。又。あ。の。如。く
其人。の。嗜。む。べ。き。に。道。明。路。の。人。を。と。ん。大。半。あり。考。す

髪白と云ふ。家子あり。結少の結れど。病の香もひ
もれぬ。西も結とつれど。出づ。中面白く。白く。感
情深。人の孝なる者。世にありたり。

あはれと。鬼角。つれも。むごく。まふ

れもおあ。人の子だ。

反。何人。おど。は。く。あり。さ。ら。ひ

信。古。を。お。ま。あ。ど。せ。ぬ。も。の。ど。け

唐土の陶淵明。手前の情。小童一人。その名。中。送
し。汝。い。ぬ。子。と。聖。人。の。子。也。不。汝。を。く。く。て。汝。を。登。し

や。の。送。し。の。通。の。君。子。と。世。に。と。ま。る。べ。く。又。人。に。身。上
の。多。く。の。婚。礼。祝。儀。の。財。色。か。の。挿。入。し。て。な。れ。し。不。如。意
と。ある。事。あり。高。貴。の。運。ぶ。運。の。力。に。お。ま。り。ぬ。事。あり。是。身。か。お
急。し。し。事。と。あ。げ。其。好。の。花。笑。を。あ。ま。り。起。る。事。あり。
別。る。女。子。婚。入。の。交。交。あり。世。の。不。り。挿。入。お。お。あ。る。事。あり。
己。が。命。を。知。り。た。る。人。も。お。や。ま。る。事。あり。況。や。命。治。を。あ。り
す。花。美。を。好。む。人。お。終。て。お。や。是。命。分。と。婚。の。不。自。也。と。を
あ。ま。り。起。る。事。也。い。前。は。終。て。命。分。の。場。止。す。る。處。
夫。命。の。命。あり。あ。り。と。知。る。し。是。と。あ。り。た。れ。其。後。の。

正徳の事

大

百供の人からあさむらぶらうへ

家のおもてしるさびら

世家の心大入用意交是を用也

とてあすうやる屋うへ

御の志を修りて熱く大名の道中をさるに

たの中官有の候びに秘あるは居らせぬものあり

心得をば言半ありし所意推されしあり

半やうてんはわらうと慈悲たるんが

世俗の如く下流の天性長純し

とあつて人々を招き何れも此半をあつて

大恩はあつて貴方御半とやうに

病つと好む世界の教つて

半とあつてめらう者あり

てせむ教さる中を

楠成の役のやうな

智を以て是とたが

是の如くあり

あつて神將也

中和を得てはひりしは是の後より其の勢を以て見れば
あり息滅亡するものなり其の勢を以て見れば
らぶるものなり其の勢を以て見れば
あり息滅亡するものなり其の勢を以て見れば

批記
おとらぐ古港より
は長瀬あり
官邸を練
河ぞ生田が

是の戦い
是れと
兵書より
斗りて
あり其
もさ
吟
こ
を大

まこと事から要也人切有て當ある時至事大ひよ。
 倦疲るしりり。是とあれ。是と心得よ。
 又人の家庭を切強盜あるを盗人と斗りあもわら
 ぶ。是ららごあら心重とるをりよ。強言とんと。内強
 する。人の物を掠奪。私曲侵好し。こり。合ひ。上
 の。別れ。痛極とある。あま。情緒。まろ。人。を。具。負。為。擔
 て。我。も。疎。と。思。す。ら。役。人。の。大。飛。こ。世。を。吟。味。さ。て。
 給。を。さ。ら。う。ま。あ。ま。と。事。中。一。あり。は。こ。の。ま。の。こ。大
 切。し。て。信。む。と。事。と。世。當。界。の。白。あり。

御の君あり。明鏡の如し。吾人を奉養人を押ゆる事。
 上り三人の職分也。兎角賢人を奉用ひ。ごら。空。虚
 あり。あや。と。事。累。卵。の。如し。童子。下。も。也。仁。賢
 と。信。ぜ。ざ。ら。ん。が。國。空。虚。あり。禮。義。あ。り。時。ら。下。私。を
 と。何。り。人。の。者。ら。用。也。と。の。ち。と。衆。の。鼻。陶。を
 奉。湯。の。伊。尹。と。奉。養。王。の。臣。十。人。有。て。天下。事。あり。又
 倫。借。も。也。重。あ。り。と。の。と。引。奉。て。用。ひ。狂。者。と。者。と。は
 於。錯。處。し。若。物。の。者。也。引。ち。引。用。也。れ。ん。良。服。せ。ん
 ち。何。れ。要。事。と。引。出。る。者。と。必。し。ち。也。處。し。ん。心。也。人。の。

邦家と礼と相入るんとあつて遠くへ
 西玉我礼とく。悪人の恩と奪へ
 家と奪ふの先あり。又相争る所の
 の奪恩と奪て己が身とあはれ。又忠義の者
 奪恩の形と半。あつて己の人の用と入ると
 己の土地のお遠あり。其人相と入て。知りて
 毛宛の言と半。所要也。又悪人の忠の人の縁と減
 或は日月取上古系の者。新系の此も立て。あつて
 あつてふさる。村の世半と奪。自の流あり。故とあつて。

ちの他とひと半あり。又立てた人の人
 去も有り。或は死て。泉下は報ざるものあり。大半の半
 あり。戦々兢々

身をあつて人をあつてに。逆はあ
 り。親あつて。あつてはあ
 り。あつてはあ。あつてはあ

論語三の註あり。小過を赦さるれば。下は全人
 あり。賢力を擧げんば。百職瘠むとく。り

世にわかれの過ちを赦し、重祿を下し、命を許す。半
 ある人なり。是れ大用する中、寛仁の度を、用事
 場あり。又賢才を奉用して、半と力斗りて、
 色々拙くの過つて、用半用ひ、
 務めて、拙者多し。信て國を虚して、用用自中、
 失り、困窮の中、也竟帝とくもの、衆を得ざる、
 憂とく、衆も又、衆衆陶を得ざるを以て、憂とく、
 孟子は、人たり。是れお遠あり。君子是を、
 長者の知る、あり。おん、たしくあるもの、
 あり。

子思、何れ半あり。されば、君子たり。人の、
 あり。見ゆ、
 他後、
 人あり。後、
 氣、
 あり。
 書経、
 心、
 民、

在從い得上

廿五

半もわり俊とありて心の中は油がせぬとて俊者を使
 も有り何れも管有て。梶原が漢言を伝へて多くの
 人と換じめるやうにくと。此条の所為と云ふと此条の
 悪心其地子わらぬを梶原のそ。未だこの頃知らぬ
 は此条の終り。未だの陰徳の果報あると。又頼朝公の梶
 原が漢言を伝用志ありわらぬ梶原子漢をさせて
 又を用ひぬと見せて。飛と梶原子ありぬあり。
 既に小舟着の内。幸ありその時。系時一よりおぼし
 あり半有り。是と不坊子あり。百ん。と云と云。後念中

頼朝公梶原を
河玉の因



の道書清とさせらるる半あり其為擔友也意とぞ
仰せられき所の京師が中系信用ある所なり。形朝に
あつたあ。景時が終らせざるも。後継おど其分はあ
る。西の唐う。所書ひも概系が終る。けり。をぬ得あつて
の如く。あ。あ。後日あり。浮物ゆり。と。是世上の云
ひあり。概系と。後言の役人は。使ひをあら。と。受也。漢
治つて。謀信。遠飛と。あ。如く。後。仲。後。終。おど。形。朝。の
為。皆。罪。と。交。わ。ひ。也。又。世。二。方。あ。ど。其。通。に。あ
る。也。形。朝。の。首。と。ち。り。終。あ。る。人。と。あ。ら。ん。也。

の心わつたら半。教友有是。依て。形朝の害。一。五。を
わ。あ。れ。い。是。止。半。と。得。る。は。困。む。半。に。常。に。交。へ。て。
好。む。半。あ。ら。ん。也。皆。の。害。と。あ。る。半。に。せ。ぬ。者
あり。皆。手。お。の。不。仕。合。と。あ。る。因。果。の。乃。理。必。然。あり。意
交。へ。る。也。一。も。一。層。一。
氣。と。意。方。交。わ。ん。下。な。あ。り。は。あ。る。也。上。と。又。意。せ。一
つ。の。怒。り。ぬ。も。の。こ。あ。ひ。や。う。の。あ。ら。に。あ。く。て。あ。ら。ぬ。半
あり。自。後。一。致。せ。終。ら。ぬ。成。就。せ。ぬ。也。古。借。り。目。を。記
四。方。に。あ。る。也。あ。く。武。の。身。上。あ。る。也。人。を。あ。ら。ぬ。也。

形朝の事

廿二

べうんは福徳の根源安んぬの瑞おとあうとあるべうん能
あつとくども。身と備免んぬ家びさのくどあうん馬
兼ともいふなり。極くのおんびさうらう人々分路を知り。
身とさうくたもち家内和合して多人をとく吉吉
いふなり。も後の心得もあう半つ大常勤系組の及
と考ふなり

八佾弟三ふ定公問君臣を使臣君子事ふと如何孔子
對曰君臣を使に禮を以て。臣君子事ふ忠以てさ
なり。世々の君は従ふ半つ草の風ふあひくが

如く。君臣を使ふの礼を以てされば。臣は忠を以てさ
君礼を考ふ。臣も自ら。不忠ある半つ。我れは
君の臣の不忠を智免んぬとて。礼のたゞざるを然ふべし。
臣は君の礼のたゞざるを知らんぬのたゞざるを然ふべし。
君臣和合して。大和をあら半つなり。
後弟ふいふ。就老てふふせ。られ作逆あしあや
あれが。世々の。られ。史會をんぬ。書は。られ。
おと依くて。後者。せ。られ。何れ。と。れ。
各別。人々。指柄。と。つ。もの。と。あ。れ。ど。家。系。と。を

志海一石也。陽報して。あつて其苦むを。おとす
也。あり。何分人の。おとす。天の。苦むを。待候し。又も人の
物と。うとめ。あつて。おとす。を。おとす。天の。冥加。よとめ。
後仕合。うとめ。是又。佛。聖人の。教。あり。善。心。深。くし
老子。子曰。天。網。恢。恢。と。して。疎。あれども。失。せ。ざる。也。
世。の。天。の。おとす。を。うとめ。く。何。と。あれども。悪。業。を。おとす。
ゆ。の。く。を。うとめ。一人。も。あつて。ゆる。ら。ぬ。人。は。減。ら。ぬ。
瑜伽。論。曰。業。天。の。悩。ま。す。所。作。者。あつて。之。の。
業。果。自。ら。属。を。逃。る。業。を。得。難。し。也。あり。

飛んた道に飛人と責んし。おとす。心。あつて。自。然。や
おのれ。と。わ。ら。ぬ。苦。患。を。うとめ。あり。おとす。を。
業。果。自。ら。属。を。逃。る。業。を。得。難。し。也。あり。
せ。ら。ぬ。人。は。減。ら。ぬ。

あつて。業。人。の。おとす。心。あつて。自。然。や
え。は。口。わ。り。う。と。め。自。然。や
何。と。あつて。悪。業。を。おとす。心。あつて。自。然。や
責。苦。の。おとす。心。あつて。自。然。や
え。は。口。わ。り。う。と。め。自。然。や

在從心傳上

三

俗儒の記誦詩章の族たしひる巻
の書と傳へどもくも。大業一毫もまざるあかれば
也書國字無學而の族たしひる巻
理と知り。天下の筆勢とすくせんともあはれし。わの
名実利潤の爲もむむわん。待文章と上りまはる
と。洞書の學といひ書籍と多く賞へたるを記誦

の學といふ世にやと守りて。備身正意。治國平天
下の志一のあまひ。俗儒といひ。培學的文も。儒者の
兼ふ所あれども。眼の所不遠くしとわり。是をすく
あまひ。聖人の人を教むる。實用は能く爲し。今の
學者の如く。純書を度くも。待文章は長し
たるありき。日用の所ひいふ人といひる。筆あり。學
文ありと云ひ難く。能くこれを考へよ。何ふ
道といふ。云々。筆あり。筆あり
朝夕おのが。あまひと志す

在從心身止

三

大和倫語より。白山大明神御託宣より。世人は性持
て。天地の男。偽り曲まる者。と。いふ。事。あり。と。
孔子の曰。人の生。直也。罔て生。ある。幸。なり。て。免る
や。と。い。ふ。事。あり。と。い。ふ。事。あり。と。い。ふ。事。あり。と。
正。直。ある。が。ゆ。え。に。あり。元。天。乃。直。也。直。ある。事。と。好。む。事。あり。
今。不。正。直。や。て。道。は。背。き。たる。者。の。免。る。事。あり。罔。と。
生。て。居。る。と。い。ふ。者。あり。事。は。免。れた。る。者。の。命。の
短。い。事。あり。直。が。なく。事。は。半。ハ。家。は。治。り。難。し。
と。い。ふ。事。あり。事。は。一。百。人。と。い。ふ。事。あり。如。中。の。元。天。乃。直。也。に。は。り。と。い。ふ。事。あり。

心学は常無事なり。人の心も正直ある處。現
世後生たふよあり。必しも後よりよきことと正直
あり。強れたる信あり。形れたる頼あり。と。い。ふ。事。あり。
万人の舌を妬む者。人の悪をとり。と。い。ふ。事。あり。又。心。中
に。あ。ら。ん。人。の。捨。た。れ。と。い。ふ。事。あり。現。世。の。仕。合。り。と。
心学は常無事なり。人の心も正直ある處。現
世後生たふよあり。必しも後よりよきことと正直
あり。強れたる信あり。形れたる頼あり。と。い。ふ。事。あり。
万人の舌を妬む者。人の悪をとり。と。い。ふ。事。あり。又。心。中
に。あ。ら。ん。人。の。捨。た。れ。と。い。ふ。事。あり。現。世。の。仕。合。り。と。

三十一

三十一

あり。あれ其不信の人の右に歩ひて吾輩に近き
あふべし。是吾人の仲間うちあり

愛小川の畔あり。昔々今の業あり。河江戸邊
の場。河江に地より所飛お辺。金瓶山の如く。地面
八百八十持たる。大福長者あり。彼は形を云人の所業を
味で。やせんらる。當時は代小者あり。るる。用みたる
その一人あり。たまひか。業のさしたるものは。
おみらる。その如く。さくせ。己の何もく。ぬれ。を金瓶
を抽出。古系深川はまら。ちじ。感。わ。お。女。う。ち。こ。

来ははす。ぬ身とありて。愛小も居れ。む。欠。落。て。
白人は。捨。心。を。あ。け。て。何。分。心。を。ひ。あり。又。純。子。有。り。臨。
機。應。答。の。斗。ひ。を。あ。げ。最。後。の。見。合。も。あ。り。片。
交。多。く。あ。り。て。因。り。入。あり。そ。う。方。何。業。よ。う。人。と。見。
付。口。入。り。た。べ。し。性。分。愛。の。あ。り。て。律。儀。あ。る。者。は。早。
速。を。ら。し。め。る。者。と。形。を。け。れ。ば。所。業。暫。く。思。
案。の。作。あり。しが。ま。久。愛。志。を。し。て。愛。の。あ。り。て。律。
儀。あ。る。者。の。昔。の。あ。り。た。り。と。今。今。に。て。は。皆。是。形。と
お。め。いて。左。様。の。人。を。人。と。思。は。れ。あ。り。と。中。あ。れ。ん。と。

と南のふたへ... 又吾輩は道びの... 同志の輩もお供するの... あり。實ある... 又昭政先生の接育系も丁稚夜訓廿八首といふもの

あり。實ある... 又昭政先生の接育系も丁稚夜訓廿八首といふもの... 又手紙先生の... 孝悌忠信の道と教へる孫長久... とある也

丁稚夜訓二十八首

奉公よ。素直の心。... 己人の御が... 五年すく... 口と... 足踏... 喧嘩... せが...

狂心得止

四七



小童おと
あちまの

家^かの^の門^{かど}の^の通^{とほ}ろと。用^{もち}あはは
 ぬ^ぬが^がも^もの^のふ^ふま^まを^をま^まを^をま^まを^を
 藪^{くさ}の^のや^やら^らと^とま^まの^のま^まの^のま^ま
 氷^こ居^いの^の兎^う角^{かく}お^おと^とれ^れあ^ある^る
 我^{われ}ひ^ひそ^そり^りに^にと^と免^{めん}ら^らと^とけ^けの^の侍^{さむらい}の^の
 あ^あち^ちま^まの^のあ^あち^ちま^まの^のあ^あち^ちま^ま
 合^あ半^{はん}と^とあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
 え^えん^んが^が自^じ人^{にん}の^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
 や^やと^とま^まの^の合^あ半^{はん}情^{じやう}の^の違^{ちが}い^いあ^あが

海遊心傳止

四二

伊^いとく^く忠^{ちゆう}義^ぎ新^{しん}く^く孝^{かう}行^{ぎやう}
 こそ^こ掃^{さう}除^{じゆ}礼^{らい}義^ぎ配^{まい}膳^{ぜん}何^{なに}半^{はん}の
 ち^ちざ^ざら^らく^くみ^みせ^せん^ん清^{せい}く^くその^{その}人^{ひと}
 卒^{そつ}地^ぢと^と之^{これ}し^しさ^さら^らが^が何^{なに}も^もも
 一^{いち}も^も仕^し違^{ちが}ひ^ひの^の傳^{でん}授^{じゆ}あり^{あり}り^りを
 利^り口^くぶ^ぶら^らそ^その^の義^ぎ多^たき^きと^と行^{ぎやう}意^い地^ぢと
 履^{りふ}字^じ不^ふ律^{りつ}義^ぎら^らせ^せに^にその^{その}ま^まあ
 用^{よう}半^{はん}お^おぶ^ぶら^らて^て美^み居^いを^をん^んの^のま^まら
 居^いま^まて^てら^らま^まら^らせ^せと^と君^{きみ}能^に合^あ

正^{せい}直^{ちく}も^も義^ぎの^のま^まに^にあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 儀^ぎ半^{はん}中^{ちゆう}も^もあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 高^{かう}貴^きも^もあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 窮^{きゆう}く^く這^{えん}入^{にゅう}の^のえ^えも^もあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 出^{しゅつ}せ^せら^らせ^せし^しと^とあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 手^て代^{だい}の^のま^まに^にあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 使^しひ^ひの^のま^まに^にあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も
 何^{なに}半^{はん}の^のま^まに^にあ^あら^らは^はる^る人^{ひと}も

三行の神

四六

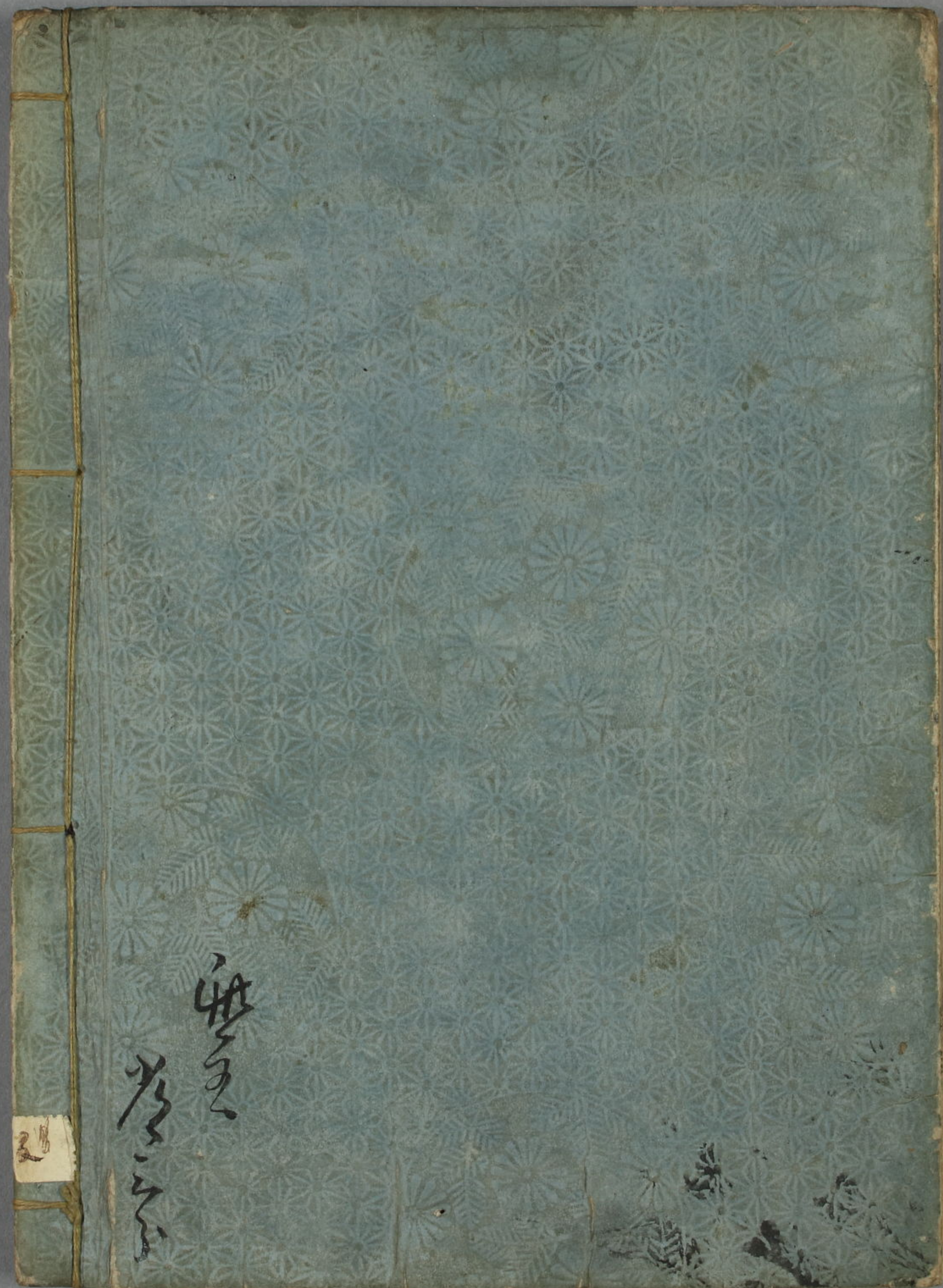
あつしり入用の家やぐ十二その頃
奉る頃。大業とあるが何より
此上二十八終

あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを
あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを
あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを

人の身は...
あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを
あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを
あつしり入用の家やぐ十二その頃
自歎の事理つらものと
傍輩の薦むるを

法の為人の爲。是れある事。大にあり。應に用ひらる。法と云ふ。害の事。亦大にあり。たゞ大の如し。大に用ひらる。身は河に流る。念を著す。大に用ひらる。おし。用ひらる。家を焼く。身は火に焼く。大に用ひらる。に害あり。宜に準例を。知る。大に用ひらる。此の巻。合意。大に用ひらる。

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '法' and '人'.



卷之二

28